

【巻頭言】



夢の「VR文化フォーラム」

—熱帯雨林と異文化体験がおしえてくれること—

仁科エミ

メディア教育開発センター



VR文化フォーラムの企画運営を担当させていただくようになって早くも8年になる。このフォーラムでは、ともすれば工学の側からのアプローチに傾きがちなVRについて、文化、環境、アートなど、人間の側から考える試みとして、学会の内外から講師を招き、刺激的なディスカッションを展開してきた。その舞台としては、東京都写真美術館を皮切りに、屋久島、バリ島、長崎、台湾、神戸などを選び、普段接することが難しい非言語的な体験性情報を共有できる機会の実現をも心がけてきた。そのころは、「みかけや形は原物そのものではないが、本質的あるいは効果としては現実であり原物であること」(館暲 <http://www.vrsj.org/main.html>)というVRの本旨を実現しようとする研究者にとって、人為の極みと自然環境とがつくりだす豊かなリアリティ体験の蓄積が大切だと考えたからに他ならない。こうした趣旨をご理解いただいた多くの学会員と講師のみなさまのお力添えを得て、文化フォーラムは工学系学会の行事としてはユニークな展開を重ねてきたと思う。

こうした催しの企画は、当然ながら、日程や収支など現実問題に大きく拘束され、夢の翼を伸ばすにも限度がある。そこで、せめてこの誌面では現実を離れ、VR文化フォーラム夢企画を二、三ご披露したいと思う。

1. VR文化フォーラム in 熱帯雨林

人間の脳は、他の動物と同じく、その発祥環境に最適化される方向で進化を遂げてきたと考えられる。人類の

祖先誕生の地がアフリカ大陸にあることは今やほぼ定説となった。人類がどのような自然環境から登場したかについても、近年の古生物学、分子遺伝学などの著しい進歩が明らかにしつつある。それらによると、かつて有力視されたアフリカ大地溝帯東側のサバンナで人類が発祥したという説は、サヘラントロプス・チャデンシスと名付けられた現時点で最古(約七百万年前)の人類の化石が大地溝帯西側で発見されたことや、DNA解析によって人類が類人猿から分岐したと想定される時期が大幅に繰り上がったことなどにより、書き換えられつつある。この人類最古の骨が発見された大地溝帯西側は、当時、熱帯雨林だった可能性を否定できない。

人類発祥環境を髣髴とさせる熱帯雨林は、今やわずかになった。実際に入ってみると、50mをゆうに超える大木が林立する森の中は意外に見通しがよく、まるでゴシック教会の中にいるようだ。その温度湿度はきわめて快適で、数値的にはエアコンが人工的に造成する夏季室内の温度湿度に近似している。熱帯雨林というと蒸し暑く不快な場所を連想する人が多いようだが、意外にも熱帯雨林には不快な「熱帯夜」はほとんど存在しない。食材は豊富で、居住地の周囲からおいしい順に取り放題。狩猟には、娯楽としての要素が多分に加味されている。この熱帯雨林での生活を「暑からず寒からず、働かざれども食うに困らず」と表現したフィールドワーカーがいたが、これは私たちが抱く「極楽」のイメージに近い。そして、森に溢れる複雑性に満ちた視覚情報や環境音の美しさは

例えようもない。とくに環境音に含まれる 100kHz を超える聴こえない高周波成分の豊かさは特筆に価する。こうした超高周波が、都市で活性低下が著しい私たちの脳基幹部活性を甦らせるのは、人間の脳が熱帯雨林と高度な適合状態にあることの証と考えられる。熱帯雨林とは、人類がどのような情報環境に適合するように作られた生物であり、「人間的」な情報処理とはどのようなものであるかについて、多くを教えてくれるのではないだろうか。

もしも現存する最も原初性の高い熱帯雨林・アフリカのイトゥリ森で文化フォーラムが開催できるなら、世界最高水準の音楽舞踊の伝統をもつ狩猟採集民ピグミーの人たちをお招きして、その歌や踊りを体験してみたい。そして、ネットハンティングに参加して、狩りの成功を寿ぐ祝宴にもつらなってみよう。現地の政情不安や治安悪化によって、夢のまた夢であろうけれども、アフリカは無理としても、私の乏しい体験のなかにもぜひご案内したい魅力的な熱帯雨林はいくつもある。アマゾン川流域でワニにとらめっこをしたりピラニアを釣るもよし、南米最古の歴史をもつアトランティック・フォレストに原初の森の姿を訪ねるのもよい。パナマ運河開削にともなって周囲が水没してできたバロ・コロラド島には、人為の及んでいない森林生態系がスミソニアン財団によって手厚く保全されている。ここでは、太古の森林とエアコン完備の超近代的な研究施設とが壁ひとつをへだてて隣接するという、シュールな情景を目の当たりにすることもできる。アジアにも、ジャワ島やボルネオ島をはじめ、すばらしい熱帯雨林が今なお残っている。そうした森林は政府機関等によって保護されているため、許可を得て内奥までたどり着くことは容易ではないけれども、

そうした森の中で数日過ごすと、当初は見えなかった小動物のすばやい動きが見えるようになったり、深夜の驟雨の訪れを熟睡中にも関わらず感知できるようになってくる。都市で眠りこんでいた五感が目覚め、研ぎ澄まされていく実感に驚かされる。こうした環境には自動車は入れず、電気もジェネレータが稼働する限られた時間

しか使えない。屋外の漆黒の闇の深さ、電気がなければ PC もインターネットも VR も機能しないという至極あたりまえの事実の再認識は、技術と生存とに関わる大きな示唆を私たちに与えてくれるのではないだろうか。

2. VR文化フォーラム in モスク

VR を含む工学、技術、科学は、普遍性のある知の体系だと考えられがちである。確かに、例えば万有引力の法則は、文化の違いと関係なく、地球上どこでも同じに作用する普遍性をもっている。しかし、科学技術が実は大きな文化的なバイアスのもとに成立していることも忘れてはならない。少なくとも私たちは、「西欧近代」という、自然の加工に対して特異的な活性をもった地域文化の影響下にある。そのことを教えてくれるのが、非西欧近代文化圏での体験だといえよう。

とりわけ、現在の日本と隔たりが大きいイスラム文化圏には、新鮮な収穫が期待できる。たとえば西アジアの歴史あるモスクに凝縮された感性脳を直撃するめくるめく空間演出技法は、VR に関わる叡智の宝庫とさえいえる。信仰・宗教と科学技術とは、意外に近いところに位置しているのかもしれない。そういう点では、初期キリスト教会や東欧正教会の聖堂、ヒンドゥー寺院やその絢爛たる祝祭などにも、瞠目すべきものが多々ある。それらを体験することを通じて自らの文化的背景をあらためて発見するとともに、科学技術に対する複眼的相対的な視点を形成することも、VR 研究の成熟に欠かせないことではないだろうか。

夢はさておき、今年の VR 文化フォーラムは 7 月 17 日、上海で開催される。今回は「亞洲の芸術と科学」と題して、日本・中国・韓国の学会の共催による大規模な国際的イベントとなった。上海は、東洋と西洋の文化的坩堝、「魔界」といわれる不思議なバイタリティに溢れた都市。そこに集う研究者たちの出会いが、これまでにない刺激を VR 研究に及ぼすことを心から期待している。

【略歴】

仁科エミ (NISHINA Emi)

独立行政法人メディア教育開発センター 研究開発部 助教授

1984 年東京大学文学部卒業。1991 年東京大学工学系大学院都市工学専攻博士課程終了。1992 年東京大学工学部助手、1993 年より現職。専門は情報環境学。メディア情報環境と脳との適合性評価研究に従事。